ていたことがわかる。

今日では、頭部、背部、腹部を走る四行線は四肢の先端より起こった十二経脈の内に包含されている。しかしながら実際の治療には、背兪穴や募穴等は、四肢に連なる経脈とは関係なく、体幹内部の臓腑の治療に応用されている。この事実は、四肢を中心とした経脈論のみでは全てを包括することができないことを意味している。これを補うためには今回取り上げた督脈と任脈を中心とする体幹における五行の経脈論を再考する必要がある。

（東京理科大学薬学部生薬学教室）

『医心方』に引く『諸病源候論』の条文検討——その取捨選択方針初探

○平馬直樹・小曽戸洋

わが国最古の現存する医書『医心方』は、主として唐以前の中国医書の引用によって構成される。そのかけがえのない資料的価値に比して、独創性に関しては高い評価を得ていない。が、全三〇巻の構成は特徴的な配列を取っており、中国医書の引用に際しても撰者独自の見識に基づいて取捨選択されたと考えられる。本書の編纂方針に多角的に検討を加えその内容自体を吟味することは、資料性とは別の観点からその価値を探る意義を持つ。

『医心方』に引用される医書中、最多の引用回数を占めるのが「病源論」として引かれる『諸病源候論』（以下『病源』）である。『病源』は唐以後の医書の疾病分類法、病態概念に強い影響を与えた病因・病理・病態学全書である。『医心方』にはその総項目数の約三分の一が、五五六回に

わたって引用される。しかも『医心方』巻一・二・二六〜二八・三〇の総論、針灸、養生、本草等を専門に述べた巻を除く病候各論の各巻には満遍なく引用されており、巻一九〜二五の服石、婦人小児の巻はやや引用頻度が低いが、巻三〜一八においてはその項目中四分の三以上に引用されている。その上殆どの場合各項の首に引かれており、一般的病候各論は各項の首に『病源』を引いて病態を説明し、次いで他の医書から引く方論を附すのが普遍的スタイルとなっている。従って『医心方』構成要素として極めて重要な地位を占める。

今回、『医心方』の医書引用方針を探る一端として、現伝『病源』とその『医心方』引用部分との校勘調査を行った。その結果と印象を述べる。なお二書とも現伝本がどの程度旧態を維持しているか不明であるので、細かい字句の穿鑿は避け、『医心方』が削除した条文に焦点を絞って調査した。

一、脈論の排除。一部例外が見えるが、ほぼ悉く脈論を捨てており明らかに意図的なものである。『医心方』は巻二の鍼灸部分にも脈の記載がなく、全書を通じて脈論を排している。

二、『病源』各項目末尾にしばしば見られる「養生方導引法云」以下の記述はすべて削除。導引すなわち体操療法の部分である。また「養生方云」で始まる衛生知識等の記載は、『医心方』中二〇余項目に採録されるが例外的であり、大部分は削除されている。巻二七・二八に養生に関して集中的に述べているので、病候各論では最少限の記述に留めていると解釈できよう。

三、病因病態の解説に対する取捨にはいくつかの傾向がある。巻三第二〇編「治中風癲病方」に諸癲の種類を列挙しその病候の説明を削除した上で、康頼自身の言葉で「論諸癲形状、在本書依繁不載」と記している。このことから基本的には繁細さを避けるために条文取捨を行ったと考えられる。では何を以て「繁」と判断したのか。以下にいくつかの傾向を列挙する。

(1)経脈の走行を用いた解剖学的説明を削除。巻五第一篇「治耳聾方」で十二経脈が耳に絡すことを述べた後、腎の病が耳聾を引起こす機序を述べた部分を削除するなどである。巻二の鍼灸の部分にも経脈の走行の説明はなく、わず

かに巻二二の妊婦脈図に経脈の走行が図示されている。経脈の走行はあまり重視していないとの印象を受ける。

(2)臓腑の生理的な解説を削除。殊に五行説に基づく原則的臓腑理論を省いている。この傾向は巻六の五臓六腑病の引用に端的に表われている。たとえば肝病の説明中「肝象木。旺於春。其脈弦。其神魂。基候目。其華在瓜云々」の記載を削除している。また各臓の季節毎の病症、いわゆる四時の病の説明も省いている。

(3)「諸癩」「虚労」「骨蒸」「傷寒」「瘧」「積聚」など『病源』がその病態を詳述している論からは、基本的な症候の解説と論後に引用する方の条文の理解に必要な用語を挙列するに留め、複雑な病因病態の説明は省いている。

(4)一方、『病源』の痔病に関する六論を「治諸痔方」一篇にまとめるなど項目数を整理しようとする意向も伺える。ただし以上の(1)〜(4)は全項目を通じての普遍的傾向とは言えない。

〈まとめ〉『医心方』は『病源』の脈論及び導引法の記述を排除している。また経脈の走行を用いた病態解説、五行説に基づいた臓腑理論による病態解説、病候を直接説明するものではない臓腑の生理学的説明、四時の病に言及する部分などを削除する傾向がある。ただし臓腑経絡理論や五行説に批判的であったとは断言できない。病態を複雑な中国医学理論に基づいて説明する記述に関しては、繁細さを避け症候と直接関連する部分の引用に留めようという意向が汲みとれる。それは『病源』が病因・病理・病態学全書の性格を持つ書で、重複文も多く重要項目に対する解説が詳細であるのに対し、『医心方』は方論を中心とする臨床医学全書であるという両書の性格の違いに負うものであろう。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室)